

第三十九回 日本高血圧学会総会

若手企画 Young Investigator's Promotion (YIP) 最優秀賞の受賞に当たつて

医学科四年 岸尾 雄



右から2番目が筆者

今年四月から七月にかけてリサーチクラークシップというカリキュラムがあり、私は始め医学科の四年生は様々な教室に配属され、研究生活を送りました。私は、本学の循環器・腎臓内科学の教室で、生活習慣病の研究を行いました。研究テーマは、「C57BL/6野生型マウスにおけるアンジオテンシンII刺激によるインスリン抵抗性の検討および1型アンジオテンシンII受容体結合因子（ATRAP）の脂肪組織特異的高発現マウスの作製」でした。研究期間が三ヶ月間と短かったため、タイトなスケジュールで実験計画を組み、日中は毎日、動物センターに足を運び、夜はたくさん論文を読みました。そして、指導していただいた先生方の勧めもあり、研究成果の一部を日本高血圧学会

で自分の可能性を最大限活かしたいと思いました。この結果で満足することなく、自分の可能性を伸ばし続けるよう、努力

総会で発表することになりました。同総会では、四十歳以下の若手研究者を対象

に研究奨励、育成を目的としたYoung Investigator's Promotion (YIP) という企画があり、そこに応募しました。幸運にも、百二十名以上の多くの応募者の中から十名のプレゼンターの内の一人として選出されました。

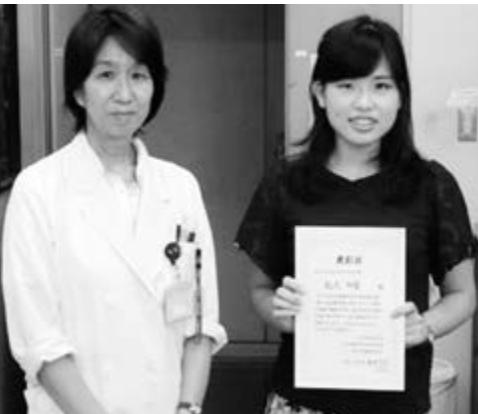
九月三十日（金）～十月二日（日）の

三日間、宮城県仙台市の仙台国際センターで行われた第三十九回日本高血圧学会総会に参加してきました。YIPでは、ポスターを用いて研究内容をプレゼンし

た後、スライドを用いて研究における評価・考察・今後の展望などを語り、その後質疑応答がありました。慶應、東大、

東北大を始め、全国から高血圧学に関する最新の研究発表がなされ、活発な議論が交わされました。私は発表前に、循環器・腎臓内科学の先生方の指導のもと、何度もスライドやポスターをブラッシュアップし、質疑応答の準備もたくさん行いました。その甲斐あって、本番では緊張することなく、堂々とプレゼンをすることができました。その晩に開催されたアワードセレモニー親睦会で、最優秀賞をいただきました。

また、二日目には一般口演での発表も



指導医の古屋准教授（左）と筆者（右）

第十回 病理夏の学校 in Gifu 2016 Most Impressive Student賞を受賞して

医学科三年 松元 加奈

私は三年生の病理学の授業を通して病気の奥深さに興味を抱き、自分の医学の理解を深めるため、「病理夏の学校」に参加しました。「病理夏の学校」では二〇一六年八月二十日～二十一日にかけて、学生二十七名、大学院生十六名、前期研修医十五名、専攻医四名、教員・専門医三

行いました。その時に、会場及び座長の先生から、学生でこれほどのクオリティの発表を出来る者はなかなかいない、今

後も是非研究を続け医学の発展に貢献してほしいと激励の言葉をいただきました。

今回の受賞を励みに、これから将来

で自分の可能性を最大限活かしたいと思いました。この結果で満足することなく、自分の可能性を伸ばし続けるよう、努力

を怠らないようにしたいと思いました。

最後になりましたが、お忙しい中指導してくださいました田村功一教授や浦井広道科の先生方に、心より感謝申し上げます。四月の段階では右も左もわからなかつた私が結果を出すことができたのは、先生方のご指導のおかげに他なりません。本当にありがとうございました。

私が結果を出すことができたのは、先生方のご指導のおかげに他なりません。本当にありがとうございました。

十名が事前に提示されたテーマに基づいて、班別にディスカッションを行い、症例解析結果を発表し合いました。

与えられたテーマは、四十代男性が胸腺腫再発を契機として下痢を中心とした消化管症状、皮膚症状、肝症状を呈し、脳梗塞と敗血症によって死に至るという症例で、私は胸腺腫との関連性からThymoma-associated multiorgan autoimmunity (TAMA) の可能性を考えました。TAMAとは、骨髄移植や輸血などの既往なしに胸腺腫にGVHD様の皮膚症状・肝障害・腸炎を発症し、胸腺腫の切除不能例や術後再発・転移を背景に持つ非常に予後が悪い疾患です。今回の症例も胸腺腫再発により死亡しておらず、病理像もGVHDと似ていることから、一致する点が多いと考えました。私は今回の症例はTAMAの可能性が高いとした上で、TAMAの発生機序や診断